

当科の概要について

当科は市立札幌病院・旧第一内科として開設され、平成20年より糖尿病内分泌内科となり、現在常勤医3名と後期研修医1名が初期研修医とともに診療しています。当科では糖尿病などの代謝疾患や甲状腺疾患（バセドウ病や橋本病など）、副腎疾患（原発性アルドステロン症やクッシング症候群など）、下垂体疾患等の内分泌疾患の診療を担当しています。

当科の特徴

当科では古くから糖尿病専門外来を行っており、また外来診療に加え、2週間の糖尿病教育入院コースを実施しています。また慢性合併症の管理について、腎臓内科や眼科などと連携し、その予防と進行の阻止を目標に掲げております。CSII（持続皮下インスリン療法）やCGM（持続グルコースモニタリングシステム）を利用した、特に1型糖尿病の血糖管理や、産科と協力した糖尿病合併妊娠の管理にも積極的に取り組んでおります。また当院には糖尿病患者の会（札幌アカシア会・日本糖尿病協会分会）があり、患者さんの親睦や情報交換等の場として活用をいただいております。

内分泌疾患では、バセドウ病治療は薬物療法を中心に行っていますが、難治例・薬剤副作用例・他疾患合併例などに対しては画像診療科と共同でアイソトープ治療も積極的に行っています。また、妊娠に伴う甲状腺機能異常の治療も産科と協力して多数行っています。

また最近では高血圧の隠れた原因として有名になった、原発性アルドステロン症に対するの検査にも積極的に取り組み、成果を上げています。



糖尿病内分泌内科
部長
柳澤 克之

チーム医療・地域連携への取り組み

糖尿病は患者さん自身の自己管理が最も大切な疾患です。その診療のためには医師のみでなく、看護師、管理栄養士、理学療法士、薬剤師等のコメディカルとのチームによる医療が重要です。特に糖尿病教育入院ではそれぞれの職種が患者の療養指導に取り組むとともに、教育カンファレンスで、お互いの連携を取りその向上を図っています。その中心として当院では糖尿病認定看護師や糖尿病療養指導士（CDEJ）が活躍しています。

糖尿病や甲状腺疾患は患者数も多く、専門医のみの対応では限界もあるため診療連携がますます重要となります。当院でも地域の先生やコメディカルとの連携を図るためにDMサークルや市立札幌病院糖尿病療養指導研究会を行い情報の交流を行っています。今後、地域連携パス実施を計画しており、地域の医療機関の皆様の一層の御理解と御協力を御願い致します。



左：病棟カンファレンス

左奥より：和田典男副部長・山本浩平後期研修医
伊藤悠介研修医

右奥より：小原慎司副医長・柳澤部長

手前は病棟看護スタッフ

上：2010年8月に日本糖尿病協会から発行された
『糖尿病連携手帳』